

Title	日吉山王祭礼図(京都檀王法林寺蔵)
Sub Title	Hie-sanno sairei-zu
Author	鷺塚, 泰光(Washizuka, Hiromitsu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.349- 353
JaLC DOI	
Abstract	A pair of four-fold screen paintings called Hie-sannosairei-zu shows the scenes of the festival of Hie-taisha Shrine held in April every year. The former shows Sakaki-no-shinji meaning the ceremony of dedication of "a sacred tree" to the shrine. The latter shows Shinyotogyo meaning the ceremony of Mikoshi's going across the Lake of Biwa. Since these two paintings give much information on the genre scene and the festival in the Momoyama period, it seems to me that they are very precious paintings in the history of Japanese art.
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0355

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日吉山王祭礼図（京都 檀王法林寺蔵）

Hie-sanno sairei-zu

鷺 塚 泰 光
Hiromitsu Washizuka

Résumé

A pair of four-fold screen paintings called Hie-sannosairei-zu shows the scenes of the festival of Hie-taisha Shrine held in April every year. The former shows Sakaki-no-shinji meaning the ceremony of dedication of “a sacred tree” to the shrine. The latter shows Shinyotogyo meaning the ceremony of Mikoshi's going across the Lake of Biwa. Since these two paintings give much information on the genre scene and the festival in the Momoyama period, it seems to me that they are very precious paintings in the history of Japanese art.

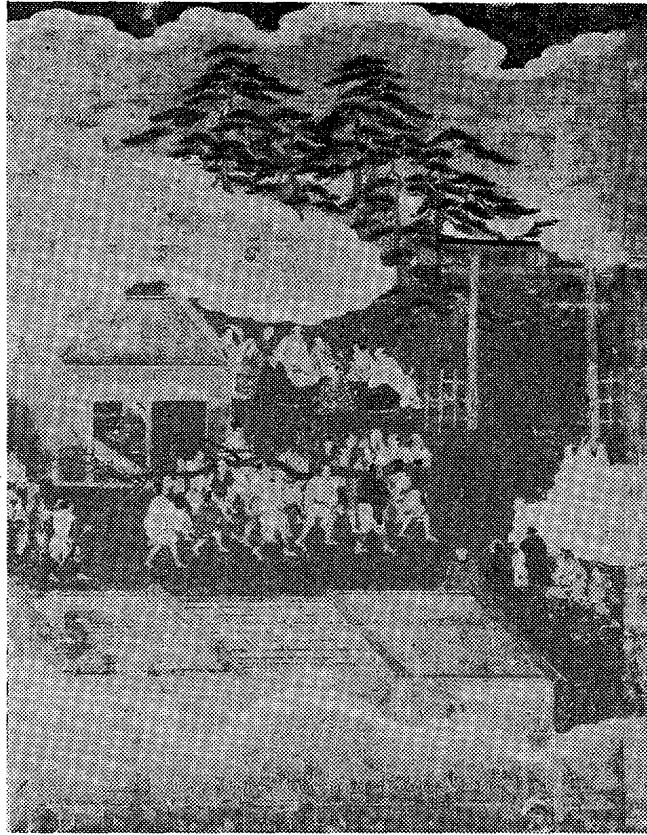
祭礼は神に対して作物の豊饒を祈り、或いは魂鎮めをして自然の安穩を願う宗教行事として、又は季節の推移を告げる風物詩として我々の生活の中に深くとけこんでいる。特に近世以後にあっては祭礼の規模は大きくなり庶民のレクリエーション的気分が強くなってきた。夏の暑い盛りに行われる京都の祇園祭や大阪の住吉大社の祭礼（夏越大祓）はその代表といふことができよう。これと並ぶものに大津日吉大社の山王祭礼がある。ここに紹介する日吉山王祭礼図はこの祭の様子を四曲屏風一双にあらわしたものである。絵の説明に入る前に神社の大まかな概念を述べておくこととす

日吉山王祭礼図

る。日吉大社は霊峰比叡の地主神，天台宗の護法神として延暦寺と深いつながりをもっていた。神社は二つの系統に区分される七社から構成され，その一系統は東本宮を中心とする四社で，これらは氏族神・農耕神としての大山咋命と玉依姫命を祭り，神体山の山上にはその荒魂をまつる牛尾神社（旧称八王子社）と三宮神社があり，山下の里宮にはその和魂をまつる東本宮（旧称二宮）と樹下神社（旧称十禪師社）がある。いま一つの系統は近江遷都の時，護国の神として勧請された大己貴命をまつる西本宮を中心とするグループである。これには平安時代になって移された田心姫命をまつる宇佐宮（旧称聖真子）と白山姫命をまつる白山姫神社（旧称客人社）が属している。以上七つの神社がいわゆる日吉山王の上七社と呼ばれるもので，それぞれに本地仏をもち天台教学と密接な関係を結び神仏習合の典型として発展してきたのである。

これら七社の祭礼は古く乾元二年（1302）に始まるもので，元龜二年（1571）織田信長の叡山焼打によって一時廃絶していたが，天正十九年（1591）には元の如く復興され，その後は年をおって盛大な祭になった。祭礼の準備は正月十八日に大政所の鳥居の後に注連を張ることによって始まり，様々な行事の後四月中の申の日にクライマックスを迎えるのである。本図に描かれている状況はまさにその時の様子である。

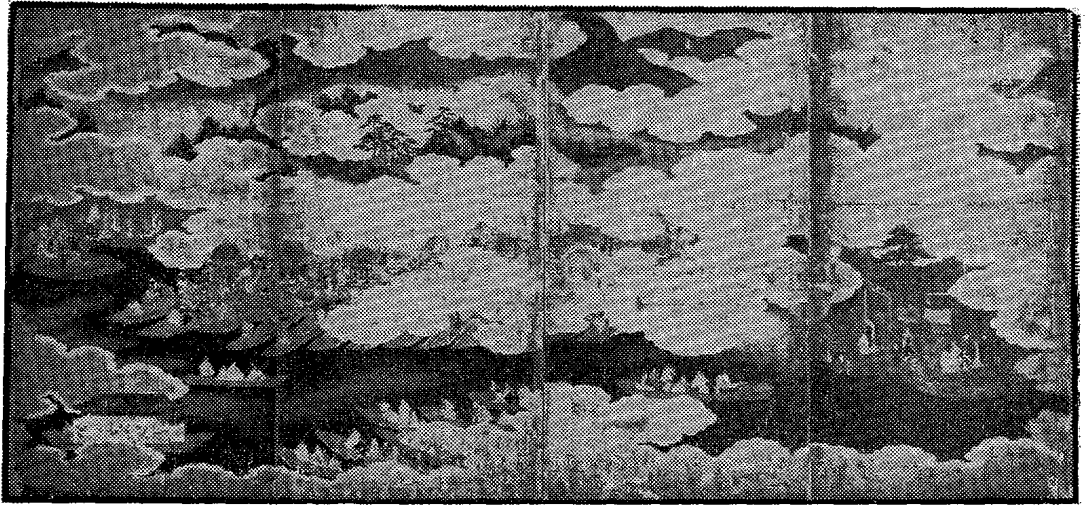
先ず右隻から見ていくことにする。画面は大型の箔を用いた金雲を上中下三段にめぐらし，「榊の神事」（第1図）を描いている。画面上端の左右には比叡山の連峰を右は緑青，左は具がちの緑青と群青によって表現する。その下に杉と松の社叢にかこまれた桧皮葺丹塗りの社殿が描かれる。第1扇には右から東本宮，東本宮楼門，樹下宮が，第2扇には白山姫社，宇佐宮，第3扇には西本宮が望まれ，その左の木立の中からは園城寺のものと思われる瓦葺の三重塔が姿をあらわしている。画面下方は榊奉納とそれを取りまく物見の衆や町家が表わされる。三月二十七・八日頃山門山内から切り出され，大津四ノ宮に移されていた大榊は中の申の日，未の下



第 1 図 榊の神事(部分)

刻、宮仕に守られ西本宮へ奉納されるところである。行列は左から右へと進み、先頭はまさに二ノ鳥居にかかろうとしている。その後方には衣冠束帯に身をかため馬に騎って礼笠をさしかけさせた四宮と五所社の神人が従い、更に胴丸を着けた警固の公人がこれに続いている。見物衆は道の片わらによってすわり、或いは家の内からこれを見守っており、画面右下隅には子供の遊び戯れる様子も描かれている。

一方左隻は、「神輿渡御」(第 2 図)をあらわす。未の日西本宮に集参した七社の神輿は桂の木をつけ、翌日申の刻西本宮を出て楼門前の春日岡で装飾を整え、そこから競争で琵琶湖畔の七本柳に至り、板を渡して二艘を一搦めにした船に乗せ辛崎の南五町程の所に渡御する。画面下方にはこの時の様子を描く。右下端に三ノ鳥居を配し、多くの駕輿丁に担がれた神輿



第 2 図 神輿渡御

は先を争って七本柳にもやう神輿船へと殺到し、或るものはすでに船に乗り移っている。見物衆は岸で或いは船上でその壮絶さを見守る。湖上には辛崎沖で幣帛を大宮の船に渡す小船が描かれ、それには素袍袴の船人が乗る。その後方には神輿船に御膳をそなえる栗津の御供船が配される。船は屋形を設け日吉大社の使である猿を染めぬいた幔幕をめぐらせている。画面上方の雲間に比叡の連峰を表わし、第3扇と第4扇には逢坂山を越えて京から大津に向う旅人の姿も描かれている。

描法は人物や樹木には当りのある線を用い、建物は緊細な鉄線描とする。彩色はいずれもかなり厚手であるが神輿の装飾や着衣は細筆を用い自由に華麗な文様を描いている。人物の描写は各々個性があり、躍動する姿態やその表情はきわめて精彩に豊んでいる。金雲の周縁を胡粉下地として金泥でくくる手法や湖水の表面に金泥をはく手法はやや時代の下ることを示しているが、その製作時期は慶長期を降らぬものと考えられ、京狩野に属するかなりの技量をもった画師の筆になることが知られる。尚本図は現在屏風装に仕立てられているが各扇に襖の引手金具の跡があり、もと襖絵であったことがわかるが、その伝来は明らかにすることができない。

室町時代の末から社会状勢の変化に伴い絵画芸術に風俗画という新しい

ジャンルが生まれるに至った。これは従来大和絵として描かれていた名所絵、月次絵、四季絵などを母胎としたもので、これらの諸要素は一度“洛中洛外図”という垣塙で統合され、それが更に桃山時代に入って遊楽図、祭礼図、合戦図等に再び細分化されて来たものである。就中祭礼図はその主題のニュース性と自然の情景の中における群集表現が時代の好尚に合致したらしく、その制作は相当多かったものと思われる。しかしそれらの大部分は屏風装であり、本図の如く襖絵として描かれたものは少く、わずかに円満院宸殿の住吉社頭図や名古屋城旧対面所の襖絵にその例を数えるにすぎない。その意味からも伝来が不明であることはおしまれるが、桃山時代風俗画の優作として貴重な遺品ということが出来よう。

(文化庁文化財保護部・文部技官)